



EL SALVADOR

学校名：千葉市立鶴沢小学校

氏名：元吉 佑樹

[担当教科：小学校全教科]

● 実践教科等：道徳・社会科

● 時間数：全6時間

● 対象生徒：5年生

● 対象人数：35人

1 単元名

- ・世界で活躍する日本人（道徳）
- ・わたしたちの生活と環境（社会科）

2 単元の目標（ESDの能力・態度）

道徳

- ・日本とエルサルバドルの小学校の比較を通して、多様な文化や生活があることを知り、自分たちの生活と同じところや異なるところがあることに気づく。（多面的・総合的に考える力）
- ・エルサルバドルで活動する日本人の思いを知り、夢や目標の大切さについて自分の考えをもつ。（未来像を予測して計画を立てる力）

社会科

- ・エルサルバドルで防災教育を行う日本人の姿を通して、日ごろから防災意識を高めることの大切さに気づく。（多面的・総合的に考える力）
- ・エルサルバドルでの「カエルキャラバン」の活動を知り、自分たちの避難訓練と比較して考えることで、これからの防災について関心をもち、自分たちにできることについて考える。（他者と協力する態度）

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

A.日本とエルサルバドルについて、自分たちの生活と同じところや異なるところがあることに気づく【多様性】

B.エルサルバドルで活動する日本人の思いや願いに触れ、国際協力の大切さやそれを行う人の使命感について考える。【連携性】【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

本実践に関して、

道徳は学習指導要領の内容〔第5学年及び第6学年〕の「4 主として集団や社会とのかかわりに関すること」の(4)「働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役立つことをする」や、(8)「外国の人々や文化を大切に作る心を持ち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。」に該当する題材である。

社会科は学習指導要領の目標(1)「我が国の国土の様子、国土の環境と国民生活との関連について理解できるようにし、環境の保全や自然災害の防止の重要性について関心を深め、国土に対する愛情を育てるようにする。」に該当する単元である。ここでは内容(1)我が国の国土の自然などの様子に好いて、次のことを地図や地球儀、資料などを活用して調べ、国土の環境が人々の生活や産業と密接な関連をもっていることをかんがえるようにする」のエ「国土の保全などのための森林資源の働き及び自然災害の防止」を扱う。

本実践では、子どもたちがエルサルバドルをより身近に感じることができるよう、現地の小学校で活動する久保隊員と石田隊員を取り上げる。今回の研修では、日本の国際援助は、現地で働く隊員の方々の思いや願いによって支えられていることが明らかとなった。子どもたちにとって具体的に捉えづらい「国際協力」という事象は、現地で活動している隊員の方々の姿や言葉によって具体化されると考えた。「誰かの役に立ちたい」「人のために自分の力を生かしたい」という人の思いがあつて

こそ、国際協力が成り立つということを強く感じた。そんな人々の姿を知ることは、子どもたちにとって今の自分と比較する対象となり、これからの自分を考えるきっかけになるであろう。教師が見てきた小学校の様子や隊員の思いや願いを具体的に調べたり触れたりし、普段の生活と比較をしながらこれからの自分たちには何ができるか、について考えていく。

(2) 児童観

本学級の子どもたちは、テレビやニュースに触れる機会も多く比較的社会事象に対して関心をもっている。社会科の前单元「情報化社会と私たちの生活」では、情報は人の働きによって発信され、その発達によって社会が変わってきていることを学び、これからの情報化社会の一員として自分たちには何ができるか、一人一人が真剣に考えることができた。そのような子どもたちに、本実践を通して国際社会を生きる地球市民としての自覚を育て、そのような社会ではこれから何が自分たちにできるのかについて考えられるようにしていきたい。

(3) 指導観

「国際協力」という社会的事象は、子どもたちにとっては具体的につかみづらいものである。そこで本実践では、教師が実際に現地で会い、お話を聞くことができた久保隊員と石田隊員の2名の具体的な人物を取り上げ、子どもが学習材をより身近に感じることができるようになりたい。

久保隊員は道徳で扱い、現地の小学校と日本の小学校との違いを資料から明確に読み取らせた上で、久保隊員へのインタビュービデオを視聴する。インタビューの中で久保隊員は、現地へ赴任した理由を語る。なぜ、国際協力の分野に飛び込んだのか、隊員の生の声を聴くことで人の思いに迫り、これからの自分について考えることができるようにしたい。

石田隊員は、「カエルキャラバン」の活動と共に扱う。日本で行っている、「素早く逃げる」ことに重点を置いた避難訓練と、現地で行われていた防災教育を比較し、どうしてこのような違いがあるのか問題意識をもたせたい。その上で、現地では一人一人に当事者意識を持たせ、災害が起きた時には自分にできることを実行できるようにさせたいという隊員の強い思いがあることに気づかせたい。日本とエルサルバドルの防災教育の違いに触れ、これからの防災について考えることができるようにしたい。

以上のように本実践では、道徳と社会科を通してエルサルバドルで活躍する日本人の思いや願いに触れ、国際協力の現場について理解を深めるとともに、子どもたちが自分自身を振り返り、これからの国際社会を担う一員としての自覚を養いたい。

5 評価基準(7で扱う授業事例に対応)

観点	道徳的心情	道徳的判断力	道徳的实践意欲・態度
評価規準	世界で人の役に立ちたいという隊員の思いに触れ、自分の力を役立てようとするものの価値に気づく。	日本とエルサルバドルの違いと同じところに気づき、どちらも価値のあるものだという思いをもつ。	自分にできることを考え、みんなのために実行しようとする。
評価方法	ワークシート	ワークシート	発言・行動

6 単元の構成

時限	小单元名	学習のねらい	授業内容
1	(道徳) 世界で活躍する日本人	○多様な文化や生活があることを知り、自分たちの生活と同じところや異なるところがあることに気づく。 ○エルサルバドルで活動する日本人の思いを知り、夢や目標の大切さについて自分の考えをもつ。	* 7 授業事例の紹介 参照
1	(社会科) 自然災害を防ぐ	○日本ではどのような自然災害が起きているのかを	・3.11のニュース映像を視聴し、東日本大震災について想起する。



		知り、災害を防ぐ方法について疑問をもち学習問題をつくる。	・近年日本で起こった災害について教科書で調べる。 ・多くの災害が起きていることから生活を守る方法について問いかけ、学習問題をつくる。
2		○国や市町村が災害を防ぐために様々な取り組みをしていることに気づく。	・千葉県役所から配信されている防災メールをもとに、地域で行われている災害を防ぐ取組について調べる。 ・地域ではどのような取り組みを行っているのかについて、調べたことをもとにして考える。
3		○自然災害から身を守るには、自分たちにできることを行う必要があり、それはどんなことがあるのかについて考える。	・エルサルバドルで行われている「カエルキャラバン」の様子と日本での避難訓練の様子を写真で比較し、フォトランゲージを行う。 ・エルサルバドルでは、子どもたちは逃げるだけでなく防災に関わっていることに気づく。 ・「カエルキャラバン」を推進している石田隊員について知り、過去の阪神淡路大震災の経験がもとになっていることに気づき、自分たちにできることをしようとする意欲をもつ。
4 ・ 5	↓	○「カエルキャラバン」を参考にして、災害が起こった時に自分たちにできることを実際に体験し、災害時に行う意欲をもつ。	・災害が起こった時、どのような活動が必要になるのか調べる。 ・けが人の搬送の仕方や建物の下敷きになってしまった人の救出方法を知り、実践する。 ・身近なものでできる応急手当の方法を知り、実践する。

7 授業事例の紹介

単元名【世界で活躍する日本人】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月22日(月)第2限

(イ)実施会場 5-2教室

(ウ)本時の目標

- 日本とエルサルバドルの小学校の比較を通して、多様な文化や生活があることを知り、自分たちの生活と同じところや異なるところがあることに気づく。
- 現地で活動する日本人の思いを知り、夢や目標の大切さについて自分の考えをもつ。

(エ)指導のポイント

- ・現地の小学校の様子を示した写真をホワイトボードに貼り付け、友達と会話をしながら自分たちの生活と比較できるようにした。
- ・久保隊員のインタビュービデオを視聴し、生の音声を通して人物の思いに迫ることができるようにした。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 3分		1. 世界で活躍する日本人にはどんな人物がいるか考える。	一斉	・日本人が様々な分野で活躍していることがわかるよう、多様な意見を認める。	
				渡部陽一さん 本田圭佑さん 北島康介さんもいるよ。	
展開 10分		2. エルサルバドルの小学校について、写真を見て日本との違いを調べる。	個別	・ホワイトボードに写真を貼りつけ、数人と話をしながら調べること	・現地の小学校と日本との違いについて、資料から調べたことを話したり書いたりしている。
					
10分	・教師が実際に会った人物であることを知らせる。 ・どうして久保隊員が「活躍」しているのか、考える。	3. 久保隊員について知る。 		・人物の様子が具体的に伝わるよう、活動の様子を示す写真や映像を活用する。	

5 分	4. 久保隊員へのインタビュービデオを視聴し、国際協力をするに至った思いについて考える。	【久保隊員のお話】 ・あえて「壁」にぶつかりに来た。目の前の子どもたちのために何ができるか、真剣に考えるために活動に参加することを決めました。子どもたちは、日本も現地も同じ。成長する意欲に溢れています。
	【インタビュービデオ視聴】 	
10 分	5. 国際社会で活躍するとはどういうことなのかについて話し合う。	 【最終板書】
5 分	6. 学習の感想を書く	

(2) 授業の振り返り

[成果]

- ・教師自身が体験したことや出会った人物を教材化したため、子どもたちにとっても入り込みやすい教材とすることができた。
- ・ホワイトボードに写真を貼りつけたため、子ども同士の交流が生まれ、一人一人の視点を生かして日本とエルサルバドルの学校の違いを調べることができた。
- ・久保隊員のインタビュービデオは、画像だけではわからない人となりを伝える役割を担った。人物の思いや願いがより強く子どもたちに伝わり、ねらいに即した活用ができた。

[課題]

- ・ねらいをより明確にする必要があった。本時では久保隊員の思いを学習指導要領の内容1－(2)でも、4－(8)でも扱うことができる。そのため、明確なねらいを教師がもっていなければ子どもの視点がぶれてしまい、ねらいに迫ることができなと感じた。
- ・子どもにとって遠い存在であるエルサルバドルという国や国際協力を、より身近に感じることができるようにする手だてのさらなる工夫が必要である。

(3) 使用教材

1. 現地の小学校の様子が分かる写真(右)



2. 久保隊員の授業の様子・インタビュービデオ(右)

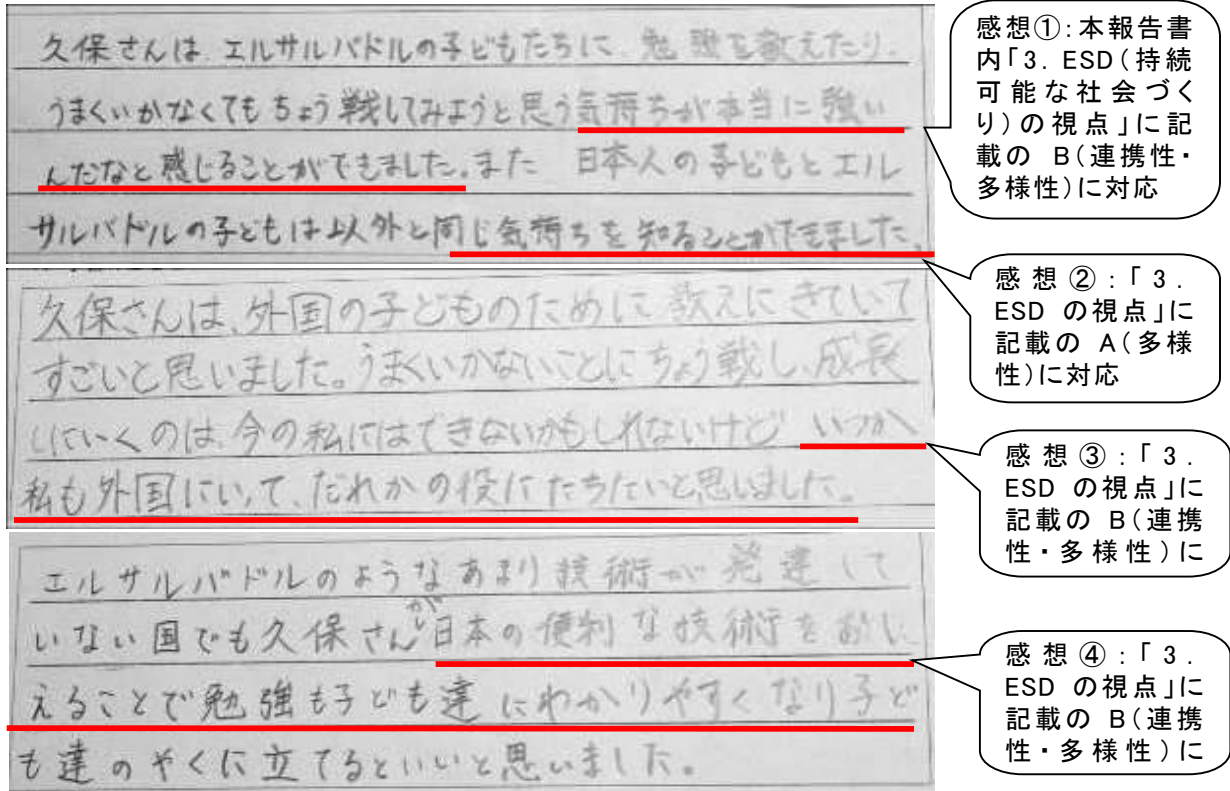


3. ワークシート(資料添付なし)

(4) 参考資料等…特になし

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

※報告書記載時点で、社会科の授業は未実施のため道徳の授業についてのみ記載



久保さんは、エルサルバドルの子どもたちに、勉強を教えたり、うまいがなくてもちやうど戦してみようと思う気持ちがあるに強いんだなと感じることができました。また、日本人の子どもとエルサルバドルの子どもは以外と同じ気持ちを知ることができました。

感想①：本報告書内「3. ESD(持続可能な社会づくり)の視点」に記載の B(連携性・多様性)に対応

久保さんは、外国の子どものために教えるにきていてすごいと思いました。うまいがなくてもちやうど戦し、成長していくのは、今の私にはできないかもしれないけど、いつか私も外国にいて、たれかの役にたたいと思いました。

感想②：「3. ESD の視点」に記載の A(多様性)に対応

感想③：「3. ESD の視点」に記載の B(連携性・多様性)に

エルサルバドルのようなあまり技術が発達していない国でも久保さん、日本の便利な技術をおしえることで勉強も子ども達にわかりやすくなり子ども達の役に立てるといいと思いました。

感想④：「3. ESD の視点」に記載の B(連携性・多様性)に

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

※報告書記載時点で、社会科の授業は未実施のため道徳の授業についてのみ記載

1. 成果○と課題●(児童のノートや発言、授業の様子から判断)

○上記②の子どもの感想に示されているように、これまでの価値観が揺さぶられ、驚きや発見を生み出す学習にすることができた。特に海外の様子については子どもたちの関心が高く、さらに普段目にするとはまずないエルサルバドルという国を扱うことで、より子どもたちの学習に対する意欲を喚起することができた。(感想②→【多様性】や共通性)

○具体的な人物を扱ったこと。国同士のつながりや、国際協力・国際貢献は目に見えない。したがって、子どもにとっては捉えづらい事象となる。そこに、現実努力している隊員の方々を具体的な人物として扱うことで、国際協力の姿が見えるようになり、日本と外国との関係がわかりやすくなった。(感想①③④→【連携性】【責任性】)

●主要教科(国・算・社・理)の中で扱う国際協力の難しさ。学習指導要領に準拠した内容としては、6年生社会科が妥当であると考えられるが、他単元や他教科の中でコンスタントに扱う内容としては、とても難しさを感じる。今後も実践を積み重ねていく中で探ることが必要。

2. 課題の改善策

・「ESD の視点」と、各教科の学習指導要領との関連を図る。一例として、持続可能な社会づくりには、子どもたちに「主体性」を養うことの必要性を挙げる。学習を通して ESD を「自分の問題」として捉えることは、遠い国の課題を人ごとにせず、自分にできることについて考えるための第一歩ではないだろうか。ESD を「主体性」という観点でとらえた時、利用可能な教科・領域の幅が広がっていくと考える。

10 教師海外研修に参加して

実際に体験した教師が一番の教材になることを、今回の研修に参加して改めて強く実感した。授業の中では、目の前で起こっていた出来事や、直接話をした人の事だからこそ子どもたちに話せる内容が多々あった。そして今回の研修では、私自身遠くに感じていた「国際協力」の具体的な姿をみることができたことや、それらが隊員の方々の思いや願いに支えられて成り立っていることを目の当たりにしたことが大きな収穫であった。これからは教師として、日本人として、国際社会の一員として自分に何ができるのかを、子どもたちと一緒に考えていきたい。